KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

スタール夫人による異文化の受容：『ドイツ論』をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 加津 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006343

関西外国語大学 研究論集 第75号（2002年2月）
Journal of Inquiry and Research, No.75（Feb. 2002）

スタール夫人による異文化の受容

――『ドイツ論』をめぐって――

中 村 加 津

本論では、スタール夫人の『ドイツ論』を異文化の受容という面からとらえることを試みる。彼女が目指したのは何よりも、人々を精神的に向上させることであった。それこそが、すべての人の幸せにつながるからである。そのためには、人々に正しい知識が必要である。知識を得るためには自由な意志と広い視野が必要である。そしてそれには何よりも平和が必要である。革命期の動乱の中からこのような信念を得たスタール夫人は、当時のフランスの閉鎖的な精神世界に、隣国ドイツの文化を取り入れることがいかに必要かを悟って『ドイツ論』を執筆したのであった。本論ではまず始めに、彼女がこのような信念を得た必然性とそれに対する為政者の弾圧について、これまでに常識として知られている事実を素描し、次に『ドイツ論』の特徴を言語と思想の両面から分析し、最後に独仏両国におけるこの書物の受容について述べる。

I

スタール夫人の死後一世紀以上もの間、日の目も見ずにコペの館の書庫の中に眠っていた『ドイツ論』の数種類の草稿を比較検討し、ヴァリアントをつけて1958年から60年にかけて刊行された版へのパンジュ伯爵夫人の解説[1]には、ナポレオンとスタール夫人について次のように書かれている。「彼女に関しては、何よりもナポレオンと反目し合ったことが最もよく知られている。(...) スタール夫人とナポレオンの関係についての研究には、ここに要約することさえ不可能なほど、数多くの著作が捧げられている。まじめな歴史家たちは皆、あれほどの権力者であったナポレオンが、この『哀れな女』が何を仕出かすかとびくびくしていたことを認めている。彼女は伝染しやすい精神の高揚（下線は筆者）によってどんなに冷静な人の心も高ぶらせ、君主たちにさえ影響を与えたのである。ナポレオンは警察を使って毎日彼女を監視し、彼女の敵意に肝をつぶした。ある日彼はジョゼフ・ボナパルト[2]に言った。『彼女はいったい何をほしがっているのだ。彼女に言わせてくれ。わしがそれをとらせるから』。『私がほし

いものではなく、私が考えることが問題なのです。』これが返事であった。実に不器用にも、彼は『物言わぬフランス』になり代わって発言するこの人を遠ざけた」。

彼女を危険視した権力者は、ナポレオンに始まったことではない。革命後の混乱の時代、どのような政権も言論については統制を加えていた。1766年に生まれ、革命前後のフランス政府と深く関わったネッケルを父に持ち、パリの、文学者、哲学者に加えて、宮廷の人や政治家たちが出入りする「この世紀最後の大きな文学サロン」という「例外的な環境に放り込まれた」[3] 彼女が、生涯にわたって政治と文学に強い関心を持ち、また、自身のゆるぎない信念によって祖国に、全ヨーロッパに、人類に貢献する責任を感じていたことは理解できる。彼女が革命前後に、何を見、何を感じたかは、単に年表を見るだけでも推測できる。18世紀の啓蒙思想の継承者であった彼女は、1789年三部会開会への行進に参加し、1791年には穏健派の人々を自分のサロンに集めイギリス憲法について語り合っていた。一方王妃に国外逃亡を勧めたり、また、革命政府に追われている友人たちの救助に奔走する。革命直後の不安定な世相のもとで、このような生き方では平穏に過ごすことができず、1792年に最初の亡命生活を余儀なくされる。ただ、そのため、グレーブ広場での大虐殺からは運良く逃れることができた。ロベスピエールの失脚後、ジャコバン派と貴族とを接近させようとして誤解され、またもや亡命をする羽目になる。この総裁政府の時代に、政治の理念よりは生活の安定を願う風潮のなかで、社会秩序の回復のために唯一実力を発揮できる指導者として軍隊指揮者への国民の期待が高まっていたとき、彼女は『平和論』(*Réflexions sur la paix, à M.Pitt et aux Français*, 1794)を刊行した。そこで「彼女は平和は先ずヨーロッパのために、次にはフランスのために必要であることを筋道を立てて論じている」[4]。前世紀の学者たちから与えられた知識の光によって、人々は自由の大切さを教えられた。誰もが求めるその自由を守るためには平和が必要であることを、人々は革命の苦い経験から学んだはずである。「自由の名のもとに大多数のフランス人の心を一つにすることができる」[5]。このような彼女の発言や交友関係は、当時の政府には危険視される。1798年、クーデタにより新しい統領政府を立てたナポレオンも、スタール夫人へのこのような総裁政府の警戒感を踏襲することになる。彼女は1800年には『文学論』(*De la littérature, considérée dans ses rapports avec les institutions sociales*)、1802年には長編小説『デルフィーヌ』(*Delphine*)、1805年には同じく『コリーヌ』(*Corinne, ou l'Italie*)を出版するが、年々独裁色を強めるナポレオンには、ますます強く自由を求める彼女がうっとうしく、パリから、フランスからなるだけ遠くへと彼女を追いやるのである。

歴史上まれに見る変動の時代、地位保全に神経質な権力者には反目と見なされる彼女の言動は、決して彼女がとりわけ反抗的であったからではなく、むしろ、まじめさ、誠実さ、更に大胆に推測すれば、恵まれた環境に育った人にありがちの、他人の悪意の過小評価、自身の発言の過大評価を導き勝ちな、楽観的性質によるものと想像できるのではないだろうか。『ドイツ

論』を彼女は最初、ナポレオンに献呈したのである。「のんびりとした幻覚にとらわれて、そのために皇帝を感動させ得ると思ったのかもしれない。皇帝はこの書物を絶版にし、作者をコペに閉じ込める命令を下すことによって、これに答えた。コペのまわりには皇帝の警察が真空地帯を作り上げた」。[6] 彼女は謙虚さに欠け、また名誉欲にかられたと見なされる行動があったかもしれない。しかし、「むしろ彼女にあっては、献身と栄誉追求とが、矛盾なく同居していたのである」。[7]

スタール夫人は、統領政府はフランス文学としては古典主義以外のものを認めていないことを知りながら、ドイツの文学をフランスに取り入れる必要性を公然と訴える。「仮にフランスが打ち克ちがたい諸々の不幸によって、いつの日か永遠に自由への希望をすべて失ってしまうとすれば、知識の光の焦点はドイツに集るだろう。(...) 彼らは私たちよりよく、人類の運命の改善に精通している。彼らは知識の光を完成し、その信条を提供できる。私たちは暴力によってすべてを試し、すべてを企て、そしてすべてを失ったのだ」[8] と。

Ⅱ

スタール夫人は死の前年、1816年に『翻訳論』(*De l'Esprit des Traductions*) を出版する。イタリアのある雑誌のために書かれたものであるが、文学の翻訳一般についての彼女の考えがうかがわれる。

「文学への貢献の最大のものは、人類の精神的な仕事の傑作を、一つの言語から他の言語に移すことである。一級の作品はほんのわずかしか存在しない。どんなジャンルであれ天才の出現は極めて稀であるので、現代の各国民にもし自国の財宝だけしか与えられないとすれば、その国民は貧乏から抜けきれないだろう。また、思想の流通は、あらゆる商業のうち、最も確実に利潤を生む。学者たち、また、詩人たちさえ、文学のルネッサンス時代には、理解のための翻訳の労を避けるため全員が同一言語、つまりラテン語で執筆した。発展のために文体の魅力を必要としない科学には、それは有利であっただろう。(...) ラテン語で書かれた中世の詩人たちの作品は、彼らの祖国ではイタリア語に翻訳された。勉強しなければ理解できない言語よりは、自分の生活の中の感動を思い起こさせる言語の方が好まれるのは当然である。

翻訳なしにすませる方法とは、偉大な詩人たちの作品に用いられている言語をすべて知ることだとは、私も認める。(...) しかし、そのような仕事には、莫大な時間、莫大な助けを必要とし、獲得にそれほども困難が伴う知識は、普遍的なものとは言い難い。ところで、人類への貢献のために目指すべきは、普遍性である。更に言いたい。外国語をよく知っているときでも、自国語への優れた翻訳で読むと、より身近な、より親密な喜びを味わえる。このようにして同化した外国語の美しさは、自国語に新しい言い回し、独創的な表現を加えてくれる。外国の詩の翻訳によって、どんな方法よりも効果的に、一国の文学が陳腐な言い回しによって衰退して

いくのを防ぐことができる。

しかし、この仕事から真の利益を得るためにはフランス人がするように翻訳しているものすべてに自国語の色合いを加えてはならない。かりにそのことによって手に触れるものすべてを金に変えることができたとしても、そのために栄養が少なくなってしまうという結果を招くことは避けられないだろう。自分の思考にとって新鮮な感じの食物を見出すことはできないだろう。ほとんど変わり映えのしない飾りをつけた顔をいつでも見ることになるだろう。この非難は特にフランス人に与えられるべきものである。(...)

詩の翻訳が文学を豊かにするとすれば、演劇作品の翻訳は更に大きな影響を与える。演劇は文学のうち実際的な力を持つものだからである。A.W. シュレーゲルはシェイクスピアの翻訳をしたが、着想に正確さを加えたので、まったくドイツ的なものとなった。このようにして持ち込まれたイギリスの演劇がドイツの劇場で上演された。こうしてシェイクスピアとシラーが同朋となったのである」[9]。

スタール夫人にはゲーテ、シラーをはじめイタリアの詩人、ダ・フィリカイヤ(Vincenzo Da Filicaia, 1642-1707)などの詩の翻訳が数編ある。そして何よりも、『ドイツ論』の第2部はドイツのさまざまな文学作品の紹介を目的としているので、沢山の翻訳が含まれている。しかしながら、『ドイツ論』中の翻訳には、現代人の感覚からすれば首を傾げたくなるような部分があまりにも多い。わが国にも昭和初期までに翻訳されたものに多く見られるような、翻案とでも名づけるべきものである。私たちが翻訳をする場合には、原作にできる限り忠実に、しかも日本語としてもできる限り自然な文体を考え出すのに苦労するのだが。もっとも、スタール夫人自身、何回も原作のよさを十分に伝えられないとの断りを付け加えている。ただ、たいていの場合、独仏両語の差異の大きさのせいにしているのだが。もっとも、ベアトリス・ディディエによれば、「翻訳はたいてい一般大衆の好みに沿ったかたちで行われた当時の習慣を勘案すれば、スタール夫人の翻訳の不正確さを非難するのは根拠のないことだろう」[10]。とは言え、彼女の翻案はやはり出版当初から独仏両サイドの文学者から批判されていたらしい。「ドイツ人の目には、原作を裏切り、歪曲している。フランス人から見れば、原作はどうにか重要性を得る程度に美化されている」[11]。

彼女のドイツ語の知識については次のように伝えられている。『文学論』執筆後ドイツ文学の研究の必要性を感じた彼女は、息子の家庭教師についてドイツ語の勉強を始めた。1800年9月23日にフンボルトは「スタール夫人はかなりよくドイツ語を習得している」というメモを残しているが、彼女自身は同年11月3日にシャルル・ド・ヴィレールに宛てて「私はまだドイツ語をしゃべれません」と書いている。しかし1802年8月1日には、「私はドイツ語を心をこめて勉強しています。こうすることによってこそ新しい思想と深い感情とを発見できると確信するからです」とやはりヴィレールに宛てて書いている。[12] しかしながら、『ドイツ論』第2部

に紹介されているドイツ文学作品をすべて独力で翻訳するほどの力はなかったかもしれない。バンジュ夫人が序文の中で推測しているところによれば、「スタール夫人は『ドイツ論』の中に取り上げたテキストすべてを自分で翻訳したのでは多分ないだろう。彼女は同じ屋根の下にA.W. シュレーゲルという翻訳の先生を抱えていた。この人は、毎日毎日、五、六か国語を相互に翻訳していた。B・コンスタンはドイツ語の詩をすらすらと翻訳していた。L・マルネジア、ド・ヴィレール、P・バラント、シャミッソー、フォークト男爵は絶えず自分や他人の考えを翻訳していた。翻訳はコペでは芸術の一形態なのであった」[13]。しかしながら、彼女はドイツ語の詩のフランス語の詩への翻訳についてある女流詩人に相談していたこともあることなどから、必ずしもコペのメンバーの意見をそのまま受け入れず、あくまでも自身の判断で原稿を作ったようでもあると推測されている。その結果が『ドイツ論』に見られるのであるから、あの不正確さは意図的なものであり、あくまでもフランス人の読者に受け入れられやすい形で紹介することが目的であったと結論付けてもよさそうである。先に引用した彼女の翻訳論の考え方からすれば、私たちのように学問的な良心にこだわり、正確さを重視する必要はそれほど意識されなかったと受け取れる。原作への忠節よりは翻訳を読む相手のことを考えること、何よりも、同朋に、また、人類に貢献できること、つまり普遍的であることを念頭においていたようである。「複雑な時代を渉って来た彼女は、理想は現実に適合するべきことをよく知っていたのである」[14]。彼女は『文学論』の中で言っている。「知識の光が破壊しか齎さないのなら、国民の幸せにとって知識の光はどんな役に立つのだろうか」[15]。

Ⅲ

以上、スタール夫人のドイツ受容について言語の面から述べたが、異文化の受容とは本来相互的なものであることを彼女が認識していないわけではない。『ドイツ論』第3部の中に、ルターの次のような言葉が引用されている。「人間の精神は馬に乗った酔っ払いの農民みたいなものだ。片側から支えてやると、もう片側から落っこちる」[16]。こことはまったく異なった文脈の中で取り上げているのだが、この言葉を彼女はしばしば思い出したのであろうか。『ドイツ論』第一部では特に、実に公平にドイツ人とフランス人のそれぞれの長所と欠点とを並べて指摘している。お互いに違いを知ること。その上で他者の優れたところを認め、相手を模範としつつ、自己の欠点を認識しながら長所を伸ばすことを勧めている。もっともドイツのあらゆる面について十把一絡げに論じているわけではない。当時のドイツは多くの小国家によって成り立っているので、地域による差異はあることを認め、特に北部と南部それぞれの特色を分析している。ただ、ドイツ語という最も重要な一致点がある。ドイツ語とフランス語の使い分けについての彼女のつぎのような提案は、独仏両国民の性質の違いを象徴的に表現していると思われる。「思想に立ち向かうにはドイツ語を、人と競うためにはフランス語を使わなければな

らない。ドイツ語の助けを借りて深く掘り下げ、フランス語を話して目的に到達しなければならない。ドイツ語は自然描写にフランス語は社会描写に使うべきである。ゲーテは『ヴィルヘルム・マイスター』の中で、あるドイツ人女性に、恋人がフランス語で手紙をくれたので、彼が彼女から離れたがっていることに気づいたと言わせている。事実フランス語には、言外の言葉や、あることを言わないための言葉、約束することなく期待させたり、拘束することさえないのに約束するためなどの多くの言い回しがある。ドイツ語にはそんな柔軟性がない。そしてそのままでよいのだ。どんな性質のものであれ嘘をつくのにこのゲルマンの言葉を用いるのは、何よりも嫌悪感を抱かせるのだから」[17]。

スタール夫人にとって理解すべき隣人は単に地理上の隣人とは限らない。階級上の他者を知ることも彼女は忘れてはいない。「下層階級と私たちとの階級の間に自由な絆を、貧者と富者とのただ金銭的な利害関係だけで樹立されたのではない絆を形成しようとした」フォン・フェーレンベルクの業績を称え、また、ペスタロッチの教育法を賞讃し、特に彼が「可能な限り寄宿料を下げて、財産のない人々が彼の学校で勉強できるように配慮したことに対しては、特に彼に敬意を表さなければならない。彼はつねに貧しい階層に心を用いた。そして彼らに純粋な知識と堅実な教育を保証したいと願う」[18] と、評価している。万人に正しい知識を与えることはなぜ必要なのだろうか。「知識の欠陥はより高度な知識によってしか回避できない。万事において取るべき道は2つある。危険なものを取り除くか、それに抵抗する新しい力を与えるかである。私たちの時代に適応するのは第2の方法だけである。現代では純粋無垢は無知の伴侶ではありえないので、無知は害にしかならないからである。あまりに多くの言葉が語られ、あまりに詭弁が繰り返されるので、正しく判断するには多くを知らなければならない」[19]。そして正しい知識のためには、自由が不可欠なのである。「支配的な思想と異なる意見は、それがどのようなものであろうとつねに一般大衆の顰蹙をかうのである。研究と検証だけが批判の自由を与えることができる。この自由がなければ、新しい知識を獲得したり現に持っている知識を保持し続けることも不可能である。というのもある種の社会的通念に従うのは、それが真理としてではなく権力として従うのだから」[20] である。

スタール夫人が自由と知識の光を重要視する思想的背景は『ドイツ論』第3部と第4部によって説明されている。自分の哲学的立場は、たとえば宇宙の秘密を探るというような純粋に抽象的な形而上学と、人間の諸能力の源泉を探らずその働きだけを日常的な経験の範囲内で考察するものとの中間にあって、人間の魂の本質および思考の根源へと向かうものであるとする彼女は、その理由を次のように説明する。「人間の能力を抑圧しようとする主義主張はみな、例外なく卑しい人間を作る。私たちの能力は人生の崇高な目的、すなわち、精神的完成のために使わなければならないのであり、内在する能力のどれかを部分的に抹殺するのでは、この目標に向かって自己を高めることなど決してできないのである。(...) この精神が自発的に動いて

いるのか、あるいは、外部のものに触発されてしか思考できないものなのかを知ろうと努めると、私たちは人間の自由意志について、したがって悪徳と美徳について、もっと多くの知識を得るだろう。(...) この人生は、私たちが現世での美徳を自由に選択して、私たちの心が宗教的に教育され、より高度な生き方へと導かれるために役立ってこそ、価値あるものとなる。形而上学、社会制度、芸術、科学、これら全ては、人間の精神的完成に資するかどうかにより、評価されなければならない。これは、無知の者にも、学識ある者にもひとしなみに与えられている試金石である。事実、方法についての知識は有識者だけのものとしても、結果は誰の手にも届くところにある」[21]。先に翻訳に関して触れたのと同じく、ここでも現実を忘れてはならないという彼女の態度がうかがえる。

人間にとって有用な諸科学とはどのようなものか。「どんな学問も幾分かは他のすべての学問と何らかの点でつながっているあの高みにまで人が到達したとき、普遍的な思想の領域に近づいたことになる」。この文章は、現代の「学際的研究」という言葉を思い出させる。しかしここで彼女が「普遍的な思想の領域」といっているのは、「魂」のことであることは、次を読めば解る。唐突に「魂はすべての方向に光を放つ中心である」に始まり、「魂は人間全体を作る神の息吹である」[22] に終わる段落が来るからである。

上の引用はイギリスの哲学を紹介している部分からのものであるが、彼女はベーコン、ロック、ホッブスには警戒心を示す。これらの思想がイギリス人ほど宗教心を持たないフランス人に影響を与え、感覚を基礎とする唯物論、利害関係にもとづく倫理学を派生させたと考えるからである。人間は行動の決断を感覚のみに頼ってするのではなく、生来内在する良心の命令に従ってする。この良心とは全人類に内在する原初のしるしであり、自発的な思想の存在を証明するものである。そして、「人間を至高の知性にまで高める衝動は、ニュートンの天才にも、石を信仰の対象としている哀れな未開人の信仰にも、同じように見られるものである」[23] とする。

フランス哲学では、彼女は18世紀の人たちより、デカルト等17世紀の哲学者たちがドイツの哲学者に近いとして評価している。第1部のドイツの国民性に関する紹介、第2部の文学作品の紹介の部分では、独仏いずれにも偏らないよう、できる限りのバランス感覚を発揮したスタール夫人であるが、第3部に至ってドイツ哲学への彼女の心の傾きをはっきりと表明する。カントとそれ以後のドイツ哲学を紹介したあと、次のように述べている。「ドイツの哲学が実にすばらしいのは、私たちに自己省察させてくれる点である。意志の根源、私たちの生の流れの知られざるあの根源にまでドイツの哲学は遡る」[24]。第3部の冒頭に述べられた彼女自身の哲学の立場と一致する。そしてその哲学がドイツ人の精神の発達、文学や芸術、その他諸科学に与えた影響を肯定的に分析している。

カントの哲学は彼女の心の傾向に沿うものとしてとらえられていると思われるが、彼の倫理

観については次のように賞讃している。「義務という最高法規に捧げられたカントの著作には、どこまでも感心させられる。普通このような主題は抑制して語られるものであるが、彼は純粋な熱を込め、生き生きと雄弁に語っている。老哲学者の威厳への深い尊敬の念で私たちは胸がいっぱいになる。彼はいつも変わらず美徳という目に見えぬ力に従い、良心だけを支配者としていただき、呵責という用語だけを口にし、与えられる唯一の宝物としては魂の内からの喜びしかなく、しかもこの喜びは、動機づけになるべき希望すらない」[25]。スタール夫人の哲学は、人々の魂に内在する正義感とか美徳という言葉で表されているものを中心に考えられているので、倫理学とも言えるものである。そしてそれは宗教についての考察へと移っていく。「どのような努力を払っても、宗教がモラルの真の基本であるという認識に立ち戻らねばならない」[26]。

第4部、宗教と精神の高揚の冒頭には「ゲルマン民族の国々はおのずから宗教的であり、(...) ことにドイツでは、人々は狂信よりは精神の高揚に傾きがちである」[27]。「キリスト教が発展すれば、それは拡散したあらゆる光を同じ一つの中心に集め、私たちは宗教の中に倫理以上のもの、幸福以上のもの、哲学以上のもの、感情以上のものを見出すことになるだろう。というのも、これらの善きものの各々は、集まることによって相乗効果を生むであろうから」[28]と述べている。スタール夫人の理想とするこのような体系が、ドイツではできていると彼女は考える。それを可能にしたのは、彼らが魂の中に持っている無限感への感受性である。「ドイツの多くの著述家は、無限感に宗教上のあらゆる観念を結びつける。(...) 美しい理想が私たちに感じさせる精神の高揚、つまり、不安と同時に純粋さに満ちたこの感動、それを呼び起こすのが無限感である。感嘆すると、私たちは人間の運命の軛から解き放たれるように感じ、素晴らしい秘密が明かされて、物憂さや衰退から魂が永遠に開放されるように感じるのである。(...) 無限感は魂の真の属性である。あらゆるジャンルの美しいものはすべて、私たちのうちに未来永劫への、そして崇高な存在への期待と願望をかき立てる。宗教心と不滅感を心に深く抱くのでなければ、人々は森の中の風を聞くこともできず、人間の声の素晴らしいハーモニーを聞くこともできず、説得力のある弁舌や詩の魅力を感じ取ることもできず、最後にとりわけ、純真な心で深く愛することもできない」[29]。

宗教改革の成果を肯定的に解釈しているのも、彼女のバランス感覚からであろうか。ドイツにおけるプロテスタントの指導者を特徴づけているものは、強い宗教心と批判検討精神との結びつきであるとする。「彼らの理性は信仰を侵害していないし、彼らの信仰の方も理性を侵害していない」[30]。「人々ができるだけ日常の信仰を持つのはよいことであるが、批判検討精神は日常の信仰を弱めることがあるかもしれない。しかし、人々が批判検討精神へ入ったときよりもずっと宗教的になってそこから出てくるとき、その時こそ、宗教はしっかりと打ち立てられるのである。その時、宗教と知性の良好な関係ができ、お互いに役立つのである」[31]。更に、

彼女は新教と旧教との融和が可能と考えている。「宗教において本当に魂を動かすことのできるものは、あらゆるキリスト教信者に共通したものであることを是非指摘しておきたい」[32]と言っている。プロテスタントからカトリックに再改宗したシュトルベルクの『キリスト教会史』(*Geschichte der Religion Jesu Christi*, 15Bde, 1806-18)を「キリスト教のどんな宗派の人々からも賞讃を受けるにふさわしい」ものと評価し、[33]そして「いつか(プロテスタントとカトリックの)統合の声があがり、キリスト教徒のだれもが、教義的、政治的、精神的におなじ宗教を信奉することを切望するようになるであろう」[34]と期待している。

スタール夫人が最も重要視しているのは宗教であり、彼女が考える宗教の理想は、ドイツ人のものと一致する。第4部に見られた精神の高揚を重視する考え方は、すでに1796年の『情熱論』(*De l'influence des Passions sur le bonheur des individus et des nations*)に見られた。そしてドイツの書物に触れた時、彼女のそのような部分にぴったりと一致するものの存在を感じたのだと推測できる。のちに彼女は次のように回想している。「私は、ドイツ語の勉強を始めた時、あたらしい領域に自分が入って行くような気がした。そこでは、それまでぼんやりと感じていたあらゆることの上に、極めてはっきりとした知識の光が現われていたのである。しばらく前からフランスではほとんど回想録か小説しか読まれなくなっている。もっと真剣な読書ができ難くなっていったのは必ずしも軽薄さだけによるとは言いきれない。革命による諸事件によって事実や人間に関する知識だけに価値を置くという習慣がついたからである。ドイツ語の書物の中では最も抽象的な主題に関しても、それを主題にした優れた小説を読みたくさせるような、つまり、私たち自身の心について学ばせてくれるような面白さが見出される。ドイツ文学の特徴は全てを内的な存在に関係づけることである。それは神秘中の神秘なので、際限のない好奇心がそれに結びつくのである」[35]。かなり理性的に書かれた、第1部、第2部、あるいは第3部さえ、この、第4部において見せられる彼女の感動を準備するものであったと解釈してもよい。また、第2部でのドイツ文学の作品の取り扱いに色濃く彼女の好みが表われているのも、以上のことから納得できる。彼女の文体は、気に入っている作者や作品について書いている部分は、非常に美しく、感動的で、したがって読みやすい。哲学者ではカント、文学者ではシラーが彼女のお気に入りの筆頭であろう。作品では『メアリー・ステュアート』について書いている部分が特に印象に残る。彼女はシラーを次のように描いている。「私がはじめてシラーに会ったのは、ヴァイマル公夫妻のサロンでの華麗で厳しい社交の場であった。彼はフランス語をとてもよく読むことはできたが、話すのは初めてであった。私はフランスのドラマの理念が他のどの国のものより優れていることを力説したが、彼は遠慮なしにそれに反論した。フランス語で意見を述べるのが困難であり、時間がかかることも厭わず、また、彼の意見には反対の聴衆がどう考えるかを恐れることもなく、信念が彼をしゃべらせたのである。私は、初めは彼に反論するために、辛辣さと冷ややかさというフランス式武器を使ったが、まもなく、シラーが

訥々としゃべっていることの中に実に豊かな内容のあることを見抜いた。私はこの純粋な性格にいたく心を打たれた。才能ある人が、考えていることに追いつかない言葉を使ってこのような論戦に乗り出すのである。そして私には、彼が非常に謙虚な人であり、また自分の評判だけが問題であることにはとても無頓着でありながら、真理だと信じていることをとても誇りを持って活発に擁護する人だということが分かった。その時から早速、私は彼に賛嘆の入り混じった友情を捧げた」[36]。この一場面の描写だけで、スタール夫人は相手のみならず自分自身のすべてをも語り尽くしていると言えるのではないだろうか。『ドイツ論』では著者自身が直接知り合った作家の作品が特に取り上げられやすい傾向の存在が否めないが、作品よりもむしろ作者についての描写の方に魅力がある。また、訃報を聞いたときの相手への同情が特に感じられる。骨太に見えるその生き方には似合わず、情にほだされやすい人だったようである。

Ⅳ

この書物の出版にあれほども困難が伴ったのは、当時の政権が文学としてはフランスの古典主義文学しか認めなかったからである。フィリップ・ヴァン・チーゲムによれば、古典主義文学そのものが閉鎖的なものなのである。「選ばれた何人かの古代作家、何人かの近代作家、狭い範囲の大衆、分析作業には適しているが、きわめて限られた素材――これが文学の創造に定められた枠なのである。(...) この美学の中には、閉鎖的ではあるが完成された、模倣されるにはふさわしいが、外国の影響を全く受け付けない一つの魅惑的な世界が見られるのであった。(...) しかし外界は、少しずつこの閉鎖的な社会の中へとはいり込んでくる。」何人かの批判者が現れた。「しかしその批判的な情熱の発現は大したものとはならず、これら改革者たちは、古い社会と妥協してゆかなければならなかったのである。そしてディドロのような若干の狂信的な人物を除いては、メルシエのような無骨を装った何人かの作家でさえも、様式と言語の自由が支配しているような独立した一つのグループを設立するだけの勇気はなかった」。[37] これはナポレオンの野望に一致する文学である。また、フランス人たちも「この点では彼に従い、この傾向は相次ぐ軍事的な征服と勝戦の時代にとって有利に働いた。そして帝政時代の終わり頃には、フランス文学の規則、そしてフランス語さえをも全ヨーロッパに強制することを人々は望むようになった。(...) 1813年にはフランス人たちの中には、自国においてのみ豊かに花開いた趣味や文学を絶対的なものと見なす習慣がしっかりと根をおろしていたのである」[38] もっとも、亡命貴族の中にはチーゲムに次のように描かれている人々がある。「フランス革命は、このサロンのメンバーを四散させた。彼らは外国を訪れた。彼らは、昔の名声を失い、後光をも失ってもどってきた。彼らは最強者ではなかったのだ。彼らは、自分たちの内部には、心というものが、ただ単に寛大に取り扱われるようになり始めていただけの洗練されたサークルの中では表現することのできなかった一つの魂があるのだということ、そして時には彼らが

抑圧しなければならなかった自分たちの存在の深い部分からほとばしり出て来る一種の神秘的な感情の激発があるのだということに気がついた」[39]。しかしこのような、シャルル・ド・ヴィレールに導かれたスタール夫人とその仲間たちのような人たちは、少数のエリートだった。「多くの亡命貴族たちには、この影響は根深いものではなく、外的、社会的生活の表面的な状況の限界を超えるものではなかった」[40]。『ドイツ論』が出版された当時、彼女が紹介したドイツ文学の作品は、ほとんどのフランス人にはまったく知られていないものであった。「熱狂的にこの書物を受け入れる人たちと、ここに賛美されている学説を最も強く批判する人たちには、ひとつ共通点があった。どちらもドイツについて自分で得た知識を持っていなかったのである。(...) いくつかの一般的な意見以外には、文学についてにしろ哲学についてにしろ、批判している当のスタール夫人の書物から、自説を汲み取っていたのである。フランス語が普遍的な言語となってから長い年月が経っていたので、誰も外国語を知らなかったのである」[41]。

アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルは、1807年にパリで『ラシーヌとエウリピデスのフェードルの比較』(A.W. Schlegel: *Comparaison entre la Phèdre de Racine et celle d'Euripide*)を刊行する。1808年の彼のウィーンでの講義がまとめて出版され、後に各国語に翻訳された彼の名著:『劇文学について』(*Über dramatische Kunst und Literatur*, 3Bde 1809-11、フランス語ではネッケル・ド・ソシュールが翻訳して、『劇文学講義』*Cours de littérature dramatique* と題して1814年に出版)もある。これらはともに、その語調はあまりにも激しく、以上に述べたようなフランスの雰囲気の中では強い反発を買った。このように1814年『ドイツ論』がフランスで出版されたときには、「まさに(新旧)両陣営の宣戦布告がなされたばかりのときであった」[42]と言える。スタール夫人は『ドイツ論』の中で、A.W. シュレーゲルの『詩人への献辞』という詩を引用し、彼の弁護を試みている。「『ヨーロッパはこの偉大な時代(中世)にはひとつであった。この共通の土壌は寛容な思想にあふれていたし、その思想は生や死における案内人の役割を果たしている。(...) ああ!古い時代の気高いエネルギーは失われた。』(...) シュレーゲルはフランスの大作家たちの大部分を崇敬している。しかし、彼はただ懸命に証明したかったのである。17世紀の半ば以来、凝り過ぎたものが全ヨーロッパを支配し、この傾向が、文学のルネッサンス期に作家や芸術家を活気づけていたあの大胆な熱気を失わせたのであると」[43]。しかしこの弁護には大した効き目がない。「公衆も批評家たちも、この二人を区別せず、『劇文学講義』の著者のアンチフランス的不当行為のすべてをスタール夫人の罪とした」[44]。

しかし一方では、『ドイツ論』は非常に恵まれた環境の中で出版されたとも言えるのである。「帝政は崩壊し、それとともに印刷、出版に随分永く課されていた多くの制限がなくなった。フランス社会にとっては、新しい時代の幕開けであった。(...) 反動はすさまじい。みなが抑圧には執拗に反撃し、とどまるところを知らぬ激しさで出版の自由、思想の独立を主張した。(...)『ドイツ論』は一般からも批評家たちからも アンチナポレオンの出版物とみなされた。

スタール夫人はナポレオンの立派な敵であり、彼女の亡命は彼の不公平のもっとも顕著な象徴であるとされた」[45]。更に、次のような事件があった。

『ドイツ論』には独裁者ナポレオンへの非難をほのめかす部分が散見できるが、特に、ヴェルナーの戯曲を取り上げた際、彼の作品中ではそれほど一般の評価の高くない『フン族の王アッティラ』(*Attila, König der Hunnen*, 1808刊)に多くの頁が割かれている。その中に、スタール夫人が明らかにナポレオンを念頭において描いたと言える王の肖像がある。

「実を言えば、ツァハリーアス・ヴェルナーの作品にはいわゆる肖像なるものはない。スタール夫人は台詞や筋の中から取り出して、できるかぎりナポレオンを思わせる肖像画を挿入したのである」[46]。1810年にこの書物がはじめてニコル社で印刷されていたとき、誰かが密かにこの部分だけを外部に持ちだしたらしい。これは人々の手から手へと渡って読まれた。やがてこの文章は改竄され、アンチナポレオン派に利用されることになる。そして「一般の人々は、ナポレオンと大臣がこの部分ただ一個所だけを理由に、『ドイツ論』全体を罰したと思った。これは伝説として言い伝えられるだろう。スタール夫人の望むと望まないとに拘わらず、彼女は大衆には暴君の最高の敵対者ということになるだろう」[47]。「『ドイツ論』の出版は、全ヨーロッパの一大事件であった。フランスで発行されるや、定期刊行物、日刊紙は、かねて用意していた(この本が官憲に)没収されたときの詳細な事情や、刊行の政治的な意味を材料に、早速文学的記事をこしらえた。解説、評論、論文、抜粋、討論などの大合唱である。これをとりあげない新聞雑誌はなく、言及しない批評家はなかった」[48]。「『ドイツ論』の出版時の事情は全く特異である。社会のある部分の人々の知的、倫理的要求に答える一方、大衆の多くの人々には、その内容よりもむしろ政治的な理由、いわば、全く外部的な理由から読まれた。文学や思想と政治との影響関係というようなものがあるとすれば、まさにこれがその一例である」[49]。

ヘニングは『スタール夫人の「ドイツ論」とロマン主義論争』で、この書物によって引き起こされた当時の文壇の賑やかな論争について、多くの資料を利用して綿密に調べているが、いわゆる古典主義の人々からの反駁はともかく、『ドイツ論』の思想に同調する人々も二つの派に分類されるとする。その一つはコンスタン(1767年生れ)によって代表される人たちで、この書物の世界主義的な点に共鳴し、ロマン主義の理論には関心を示さなかった。「狭いナショナリズムを警戒して絶えず外国に目を向け、外国の価値をフランスに知らしめる努力に敬意を評した」[50]。政治的には自由主義者である彼らはフランス古典派の演劇に反発し、シェイクスピアや特にシラーの演劇を手本にした歴史劇を作った。もう一方は彼女の精神の高揚を前提とする理想主義的な哲学に熱狂する人たちで、主として詩を作る。「政治的には彼らは王党派であることが多い。というのも、王制になればそれまであまりにも衰退してきた文学や哲学に革新がもたらされるだろうと期待するからである」[51]。彼らは「『ドイツ論』に関して言えば」との断りつきでスーメ(1788年生れ)が代表するとされる。「革命の動乱期に生れ、王政復古期

の派手で陶酔的な風潮に酔わされた高揚した若い世代であり、彼女が持ち込んだ新しい文学の潮流に熱狂的に気後れもなく乗った」[52]。フランスのロマン派については、誰がどの派であるというような固定した分類はしにくい。文学史の執筆者間にも、統一した見解というのはないようである。ロマン派の人々は、一人一人がそれぞれ個性的な自分の思いのままに創作し、同じ人物でも思想は変化して行くこともある。しかし以上の分類は、当時の文壇事情の理解には役立つ。たとえば、バルザックの『幻滅』第2部、『パリにおける田舎の偉人』は、1820年代初めのパリのジャーナリズムの世界が描かれているが、自作の詩と歴史劇を携えてアングレームからパリに出てきた文学青年リュシアン・ド・リュバンプレは、ジャーナリズムの世界への指南役をしてくれるエチエンヌ・ルストーに、いきなり、「あなたは古典派ですかロマン派ですか」と聞かれて驚く。王党派はロマン派で、自由主義者は古典派だというのである。[53] ランソン・テュフロの文学史には、「ロマンチスムは最初の頃はまったく王党派でありキリスト教支持であった。ロマンチスムがそうだったのは、シャトーブリアンの影響を受けたからであり、また、18世紀の好尚と理念とに執着して一般に自由主義者であった古典派の作家たちに反対したからである。しかし実際は、勘違いの結果こんな分類が生じたのであった。ロマンチスムは根底において革命派だったのである。われわれは間もなくこのことに気がつくであろう。そしてユゴーやラマルチーヌが、王権から共和制のほうへと移ってゆくのを見るであろう」[54]と述べられている。

ドイツにおける『ドイツ論』受容に関しても、資料に不足はない。彼女は亡命中、実に活動的に各地で要人と交流しているので、書簡などの資料は豊富に残されている。第1回目のドイツ滞在は1803-4年、第2回目は1808年であり、これはドイツ諸国がナポレオンの支配下にあった時期である。パリに有名なサロンを開く女流作家が、ドイツについての書物の資料を集めるために来るという評判は広まり、本当に彼女がドイツを理解してくれるのかという心配もありはしたが、政治的にも力を持つこの女性の書物への期待を大きく膨らませる人もいた。ヘニングは抒情詩人、フリードリヒ・マティソンの次のような1808年の覚書の翻訳を引用している。「『ドイツに関する書簡』は、これまでに書かれたどれよりも鮮やかに、外国の詩の女神よりもゲルマンの詩の女神が優れていることを証明してくれるだろう。テムズ川、チベル川、セーヌ川にかかって、これまではドイツの美的文化の高尚さを正しく評価させなかった霧を追い払ってくれるだろう」[55]。

ドイツ人たちの反ナポレオンの感情が、期待に拍車をかけた。1813年イギリスでいよいよ『ドイツ論』が出版されると伝わると、フランス語版だけでなくドイツ語版の出版もドイツで同時に行われるよう、翻訳の準備まで用意万端整えられたのである。

しかしながらいざ刊行が実現すると、彼女の直接知り合いのドイツ人たち以外は、この書物にあまりよい評価を与えなかった。保守的な人々にとってここに見られる主張には賛成できな

い部分が多いのは当然である。彼女の世界主義さえも退けられた。ドイツには排他的な愛国主義が増大してきたためである。一方、ロマン派の人々から見れば、彼女のドイツ思想の理解はあまりにもお粗末である。ドイツ人はロマン主義の理論の面では、フランス人よりはるかに進んでいるのである。それにもともとドイツの哲学はフランス人に理解されにくい。フランスの「一般大衆は超越論なるものについては漠然とした概念しか持っていないし、批評家たちも彼らにそれについて明解な説明をすることなどあまりできない」[56]。スタール夫人とて決して例外ではない。ドイツ人から見れば、『ドイツ論』は旅行記とでも言ったほうがよさそうなものである。人々がこの書物に期待をよせていたのは、ドイツがナポレオンの軛の下で苦しんでいるときであった。しかし、1814年の今、フランスの帝政は瓦解し、ドイツ諸国は同盟軍をパリに駐屯させているのである。戦勝国であり、文学の理論では先進国である。スタール夫人の書物の出版のメリットはほとんどと言って失われていたのである。ゲーテの書簡が引用されている。「(...) もっと以前に出版されていれば、最近に起こった大事件はこの本のお蔭だとされただろう。今となっては、事が終わってから発見された予言みたいなものだ」[57]。

1817年の彼女の死後、「人々は彼女の果たした政治的役割の大きさについて報告し始めた。誰にも彼女の代わりをすることはできない。彼女の経歴や作品についての評論が至るところで見られた。文学上の敵の多くも、死後になってから彼女の才能を正当化するために憎しみや偏見を忘れた。(...) 文学と哲学の点では、1816年から1819年までの期間は特に、世界主義の波がフランス中を駆け巡った。この動きの推進力となったのは、『ドイツ論』であった」[58]。

バルザックの『幻滅』のなかで、アングレームという地方都市の社交界の女王であるバルジュトン夫人が受けた教育科目の中にドイツ語が入っている。[59] また、そのサロンでリュシアンが詩の朗読をしているとき、聴衆の一人が、「フランス語はまったく詩には向かないと思われませんか。」[60] と話している。意地の悪い発言であることを差し引いても、自己の教養をひけらかす気持ちもこめてこのようなことを学者でもない人が言う場面は、『ドイツ論』以前にはありえなかったことではないか。『ドイツ論』が普及させた知識が、その出所も知られないままに、いつのまにか民衆の中にこのように浸透しているのである。

彼女自身がドイツの文化を受容できたのは、彼女にそれを受け入れるべき素質と感受性が備わっていたからである。しかし異文化を一般に普及させるためには、実にさまざまな障害が出現する。以上は、個人、全体、両方のレベルにおける異文化受容の一例である。異文化の受容は古代から人類が行ってきた。それの現代的な意味での原点が『ドイツ論』に見られると言えはしないか。

テキスト

本論中『ドイツ論』のテキストには、Mme de Staël: *De l'Allemagne*, Nouvelle Edition, publié d'après les manuscrits et les éditions originales avec des variantes, une introduction , des notices et des notes par la Contesse Jean de Pange avec le concours de Mlle Simone Balayé, Librairie Hachette, 1958-60, t.1-5 を使用した。引用には単に テキスト と表記する。

注

1）テキスト t.I, pp.XI-XII。

2）ジョゼフ・ボナパルト Joseph Bonaparte、ナポレオンの兄(1768-1844)、ナポリ王(1806-1808)、スペイン王(1808-1813)、パリ滞在中は、スタール夫人のサロンに出入りしていた。

3）Balayé, Simone, *Madame de Staël, Lumières et liberté*, ed. Klincksieck, 1979, p.12。

4）Didier, Béatrice: *Madame de Stael*, Ellipses, 1999, p.14.

5）*Oeuvres Complètes de Madame la Baronne de Staël-Holstein*, Chez Firmin Didot Frères, Fils et Cie, 1861,（この全集については、以下に O.C. と略記する） t.1, pp.32-45.

6）ランソン・テュフロ：『フランス文学史』Ⅱ、有永他訳、中央公論社、昭和42、p.223。

7）杉捷夫：『スタール夫人「文学論」の研究』、筑摩書房、昭和33、p.23.

8）O.C., t.I, pp.277.

9）O.C., t.II, pp.294-7.

10） Didier, *op.cit.*, p.97

11）Henning, Ian Allain: L'Allemagne de Madame de Staël et la Polémique romantique, Slatkine reprints, 1975, réimpression de l'ed. de 1929, p.55.

12）テキスト t.I, p.XIV.

13）テキスト t.I, pp.VI-VII.

14）Didier, *op.cit.*, p.16.

15）O.C.t.I, p.277.

16）テキスト t.IV, p.27.

17）テキスト t.I, pp.188-9.

18）テキスト t.I, pp. 271-5.

19）テキスト t.I, p.111.

20）テキスト t.I, p.25.

21）テキスト t.IV, pp.8-13.

22）テキスト t.IV, pp.31-2.

23）テキスト t.IV, pp.43-9.

24）テキスト t.IV, p.187.

25）テキスト t.IV, pp.325-6.

26）テキスト t.IV, p.327.

27) テキスト t.V, p.7.

28) テキスト t.V, p.9.

29) テキスト t.V, pp.11-4.

30) テキスト t.V, p.28.

31) テキスト t.V, p.32.

32) テキスト t.V, p.62.

33) テキスト t.V, p.73.

34) テキスト t.V, p.84.

35) テキスト t.III, pp.323-4

36) テキスト t.II, p.21-3.

37) チーゲム, フィリップ・ヴァン・、『フランス文学理論史』、萩原他訳、紀伊国屋書店、1973、pp.195-6。

38) Henning, *op.cit.*, p.18.

39) チーゲム *op.cit.*, p.196

40) Henning, *op.cit.*, p.11.

41) *ibid.*, p.57.

42) *ibid.*, p.23.

43) テキスト t.III, pp.344-8.

44) Henning *op.cit.*, pp.22-3.

45) *ibid.*, pp.4-6.

46) テキスト t.II, p.143　脚注

47) Henning *op.cit.*, p.31.

48) *ibid.*, p.2.

49) *ibid.*, p.32.

50) *ibid.*, p.85.

51) *ibid.*, p.94.

52) *ibid.*, pp.85-6.

53) Balzac: *La Comédie humaine V, Illusions Perdues*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1977, p.337.

54) ランソン・テュフロ *op.cit.*, pp.268-9.

55) Henning, *op.cit.*, p.136.

56) *ibid.*, p.77.

57) *ibid.*, p.156.

58) *ibid.*, p.263.

59) Balzac, *op.cit.*, p.154.

60) *ibid.*, p.202.